

## 両極端の魅惑——カール・シュミットにおける抑止の終末論

アルブレヒト・デッケ＝コルニル

カール・シュミットは、二十世紀における、最も著名で、また最も悪名高き政治思想家の一人とみなされている。ワイマール共和国の議会政治に対するその仮借なき批判、その反ユダヤ主義的暴言、その反自由主義的国家理解、なにより、国家社会主義との一時的協同関係のゆえに、彼は1945年以降、「好ましからざる人物」とされることになった。本稿は、近代の世俗化過程に対するシュミットの根本的反抗を素描する。その際中心となる力点は、彼の批判の源泉となっている、神学的、ことにカトリック的要素に置かれる。シュミットの思想は、哲学的急進主義の一つの範例として解釈されるが、その急進主義とは、イデオロギー的負荷を帯びた、1920年ごろの時代気分に典型的なものだったのであり、また、一世代の知識人全体に、その思考様式を刻印するかたちで、影響を与えたものであった。

第一次世界大戦後の社会不安をシュミットは、黙示録的観点から、終末的決断の闘争として捉える。しかし、革命的な政治論者がより良き世界の前兆を歓迎するところで、彼は危機をただ否定的にのみ、すなわち、国家を破壊しようとする無政府主義的な力の侵入としてのみ、診断する。無政府主義と権威主義、君主制と民主制、キリスト教と無神論、国家と革命、これらの繰り広げる戦いにおいて、彼は断固として、国家を保持する権力の側に付く。こうした権力こそ、彼にとって、近代の経済的技術的思考の無制限な支配に対抗する、最後の橋頭堡となるものである。彼にとって肝要なことは、政治的なものを救出することであって、彼は、政治的なものが、社会主義的ニヒリズムの解放運動によって、その存続を脅かされている、と見ている。マックス・ヴェーバーが近代の定義とした、合理化・世俗化・自動化の過程に、彼は、世俗のカトリック信者として、抵抗しようとするのである。

徹底抗戦の核は神学的なものである。徹底抗戦によって、歴史についてのいかなる意味解釈が最後には勝ちをおさめるのか、という問いに決定を下される。つまり、原罪の教義を堅持し、したがって、この世では人間は救われず、その結果として、支配の必要性は廃棄不可能なことになる、という教えを堅持する、キリスト教的な政治神学が勝利するのか、それとも、人間の完全化の進展を信じ、ユダヤ教的—メシアニズム的ユートピアの流儀で、平和の王国の到来を期待する、この世の目的論への信仰が勝利するのか。

シュミットは、キリスト教の終末論的約束を世俗化するあらゆる試みに、反対する。ただ神にのみ関連づけられるべき救済の希望をこの世のものにしようとし、そのために、最悪の戦争である内戦をひきおこした、といって、彼は、左翼や自由主義者たちを倦むことなく非難する。それに対し、彼にとっては、敵対の事実を受け入れてこそ、脆いながらも平和を確保する見込みが開かれる。敵を承認してこそ、敵を犯罪者呼ばわりすることが避けられるのであるし、また、根本的には不可避なものである抗争を法的に封じ込めることも可能となるのである。

キリスト教信仰の終末論的約束を政治的に中性化することとの関連で、シュミットにとって、中核的意義を獲得するのは、カテコン [抑止するもの] の概念である。彼が念頭に置いているのは、「テサロニケの信徒への手紙 二」にある、謎めいた箇所であり、そこにおいて、パウロは終末的アンチ・キリストの登場を抑えつつ、歴史の進行を保証する、ある秘密の力に言及している。歴史の終末がいまだ出現していないのは、唯一この隠れた力のおかげなのだ、というのである。シュミットはこの歴史解釈を踏襲する。カテコンという阻止力を信頼することによって、彼は、自分の政治的保守主義の反終末論的方向性と、救済へのキリスト教的希望とを結合することができるようになる。この見方においては、国家の権威とは単に、内世界的強制力と考えられるのみならず、押し寄せるカオスを抑止し、アンチ・キリストを手なづけて歴史の終末を繰り延べるという形で、救済史的理念に奉仕することにもなる。こうして、カテコン的歴史像から、シュミットは黙示録的思考様式をとりながら、決然として反黙示録的な立場を表明しているという、独自のアン

ビバレンツが帰結する。

シュミットの政治理論を理解するうえで鍵となるのは、彼がローマ教会という制度をどのように把握しているかである。生涯にわたってカトリシズムは、彼にとって、政治的なものの理念の古典的パラダイムであり続けた。彼は、教会の政治形態のうちに、上から、すなわち、形而上学的理念の方から、一貫して実践される社会的糾合の模範を見ている。カトリック教会は、近代の産業文化に対抗する、有力な選択肢となる。教会の法学的合理主義は、近代の経済主義的一技術主義的思考に根源的に対立している。教会の至上権は、神の代理を務めるその権能にある。法王は、宗教共同体の利害代表者ではなく、地上におけるキリストの代理人である。歴代引き継がれる法王は、いついかなる場合でも、キリストが人間となったこととの歴史的連関を表現している。したがって、教会は、救済史的意味解釈の目に見える保証なのである。

シュミットがカトリック教会という権威ある制度から精練した、代理の概念は、事態の記述として考えられているのではない。そうではなくて、闘争概念の役目を担わされているのであって、それは、近代社会の無定形な力によって国家がますます浸食されてゆくことに対して、反論として向けられているのだ。そこには、国家が教会の権威主義的ヒエラルキーを模範とし、教会の形態原理を採用するのがよいのだ、という叫びが込められている。

シュミットは間違いなく、1933年初めまでは、国家社会主義者のイデオロギーにも、その政策にも、共感したことはない。にもかかわらず、1936年までの協同関係を、痛恨のしくじりとして処理することはできない。彼の政治理論は、ヒトラーの権力奪取後の状況の変化にたやすく適応させられえたのである。キリスト教に代わっていまや、民族の神話が登場し、それが、神への結びつきを、民族と総統への結びつきに取って代えた。国家社会主義の総統原理によって、久しく待望されていた、個人的主権者の無制限の行動能力が現実には復元されたと思われたのである。近代的立憲国家の規範主義は、政治的行為能力を萎えさせてしまっていることは、ワイマール共和国の終わり頃には明白となっていたが、そうした規範主義の克服のあとに、政治的な

ものの新たな英雄的時代が、ヒトラーによって幕開けしたと、思われたのである。

しかし、カトリックの代理の思想を、国家の純粹に内世界的現實に移し入れようとしても、それには成功の可能性はなかった。というのも、代理されるのは、なにか不在のものに限られるからである。しかるに、総統は、なんらかの形而上学的理念を表わしているのではなく、国家社会主義のプロパガンダにしたがって、民族との神秘的統一へと融解し、民族と直接的に同一になっているのであった。そこで問題となるのはもっぱら、虚構の代理に過ぎず、代理は、完璧に機能する操作の機構を介して模倣されるだけなのである。まさに、国家社会主義においては、民族は、その真正の意志表現を去勢され、政治主体として、抹消されるのである。

独裁体制に固有なことは、その体制が、拡散する多様な利害によって構成される、政治的なものの空間を削除するように努める、というところにある。この傾向にシュミットは抵抗しなかった。それどころか、反対に、社会的同質性の高い評価や、自由主義の多元性に対する根深い嫌悪は、政治を一掃しよう、政治に代えて単純な命令—服従関係を据えよう、という暗暗裏の訴えかけとして読める体のものである。だから、選りにも選って、政治的なものの救出に奉げられた理論のなかに、皮肉にも、ドイツの最悪の伝統に棹差す、反政治的情念が表われ出ることになる。歴史的距離が増すにつれて、国家体制の危機を克服しようという、シュミットの闘争は、それ自身が、まさにこの危機の兆候の一つであったことが、ますます明瞭になってきている。